

一般財団法人筑波麓仁会 広報誌

2022
Spring

habatake

はばたけ

Vol.2

contents

はばたけ！ワタシ：薬剤部、検査部

つなぐ：しまだみみ・はな・のどクリニック

この手で、
救える命がある



特集 コロナ禍、かく闘へり

Days of struggle with covid-19

INDEX

特集

02 ~ 05
コロナ禍、かく闘へり

06 ~ 07
はじめましてのご挨拶～
新任医師紹介

08 はばたけ！ワタシ
検査部、薬剤部

09 本の紹介
赤ちゃん紹介

10 学園ひろば

11 つなぐ～連携医療機関
しまだみみ・はな・のどクリニック

今月の表紙



感染症棟の看護師は、患者さんの日々の様子を確認したり食事やおむつ介助に当たることもあるため、多い時で一日10回着替えることもあります。

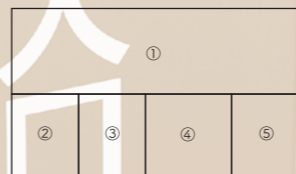
特集

コロナ禍、かく闘へり

発熱外来
Fever Outpatient



2019年12月、中国・武漢で発生した新型コロナウイルス。それから2年余り、ウイルスは世界中に拡散・変異し、世の中の様相をすっかり変えてしまいました。今回の巻頭特集では当院のコロナ対応にスポットを当てました。発熱外来設置や感染症棟の運営、ワクチン接種などに携わった現場スタッフの苦闘をドキュメントでお伝えします。



①検体採取に向かう看護師と検査技師②PHSは手放せない③患者さんに聞き取りを行う看護師④検査方法はNEAR法とPCR法の2種類⑤電子カルテには次々と患者情報が送られてくる

危機は、いつだって突然来る

駆ける。困っている誰かがいる



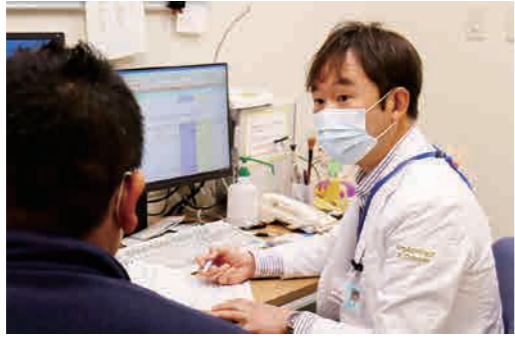
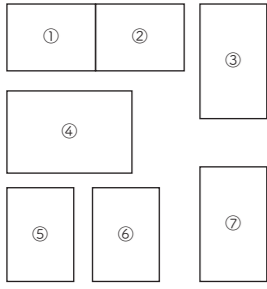
2020年2月11日早朝。夜勤を終えた感染管理室・藤川達也看護師は前夜の突然の一報に胸騒ぎを覚えていた。県の要請でクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」の陽性者が搬送されてくる。それまでコロナ騒ぎは遠い異国の出来事だった。呼吸器内科の船山康則医師も同じ気持ちだった。コロナ専門病棟がない地方の一病院にも感染の波が押し寄せた。マニュアルはなく、治療は咳止めや解熱剤など対症療法に限られるだろう。午前10時18分、物々しい防護服姿に身を包んだ災害支援DMATの救急車が到着。幸い患者は上気道炎のみの軽症で院内は人もまばらだった。SARSやMARS時のコミュニケーション通り移送動線を確保し、無事病棟に送り届けた。

◆4度の引越し

「何番の駐車場に停めましたか？」。発熱患者が専用駐車場に到着すると各所のPHSが一齐に鳴り出す。連絡を受けた事務員がスマホ問診用QRコードが印字された紙を車待機中の患者さんに手渡し、入力された情報が電子カルテに届く。完全防護の看護師が咳や呼吸、酸素飽和度などを把握しに車に向かい、検査技師は鼻腔から採取した検体を機器にかけ、検査は15分ほどで結果が出るNEAR法と約1時間掛かるが6検体同時測定可能なPCR法で、陽性判定だと電話診察か陰圧診察室に移動して医師の診察（メディカルチェック）を受け、状態に応じて入院か自宅療養となる。また、通常の疾病で当日入院・緊急入院する患者はPCR検査を受け、陰性でも診断名がはっきりしない場合は一旦トリアージ病棟へ入り、経過観察後に一般病棟へ送り出す。感染を院内に広げないための措置で、同病棟看護師はさまざまな診療科の入院対応知識が求められる。この2年余り毎日のように繰り返されている光景である。

◆

発熱外来は当初1階売店横のイトインで対応していたが、換気は不十分で問診表のやり取りは紙。一般患者はもちろん、陽性者と擬陽性者の隔離も課題だった。場所は4度引越され一昨春秋に現在の場所に落ち着いた。奇しくも最大の感染対策は



①②感染対策委員会の様子
③感染病棟でのPDA(携帯情報端末)入力は、患者さんの状態をホワイトボードに書き室外から行う④医師によるコロナワクチン接種の問診⑤⑥コロナワクチン接種は看護師が担当している⑦エアリーク(空気漏れ)がないよう、感染管理室の藤川看護師によるマスクチェックの様子

抱きしめたい。でも、今はできない



「変化に柔軟対応」体制できた

コロナ対策で陣頭指揮を執る呼吸器内科の船山康則医師

2020年5月に稼働した新外来棟だった。旧棟を利用した発熱外来と一般外来が院内の両端で分かれていたことが感染対策上有利となった。検査機器の早期確保も功を奏し、県内有数の8台態勢で感染拡大に臨んだ。準備万端と思えたのも束の間、陽性者移送のたび職員10人以上が集められ各所で業務が滞ったが、現在は陰圧機能付き車椅子で解決。擬陽性者向けの待機所として旧外来棟を活用し、ウイルス除去に効果のあるHEPAフィルター付空気清浄機も導入した。問診内容、感染対策マニュアル、検査場所や人の配置、面会の用など各部署のあらゆる困り事を吸い上げる「COVID-19感染対策会議」が機能したためだった。

◆見えない敵

東京五輪が開かれた昨年8月の検査数は月間1500人に迫る勢いだった。発熱外来駐車場は連日大混雑、「勤務が終わると防護服の下はいつも汗だくだった」とある外来看護師は振り返る。担当日は発熱外来専用PHSの電源を入れることから一日が始まる。N95とサージカルマスク

を二重装着しアイガードにガウンを羽織る。感染リスクは脱衣時が最も高いため手袋も二重。端末で患者数を確認する間にも予約は続々と入ってくる。ウイルスは医療従事者の「疲れ」に付度してはくれない。傘を差して患者さんの車に向かい、嫌がる小児患者の顔を親御さんと一緒に抑えてしまうこともある。家族に感染を広げてしまった子が、自責の念や検査への恐怖から突然泣き出すこともある。そんな時は全力で励ますしかない。「誰も悪くないよ。一緒に頑張ろうね」。小さな手を取って抱きしめることも、今はできない。

◆意識の変化

陽性者を待ち受ける感染病棟師長は、未知のウイルスへの不安で押しつぶされる思いだった。スタッフの協力は得られるか、何を準備すればいいのか。当然マニュアルはなく、感染管理室の指導の下、対策を実践していった。カウンテクニクの習得、自分に合う形状のマスク選びやエアリーク(空気漏れ)のないようフィッティングテストも繰り返し訓

練した。他病棟と比べ入院患者数は少ないものの仕事は多岐にわたった。メディカルチェックの長時間看護、面会制限の調整、移送時導線確保の各所連絡、病床のシーツを大きなバケツで消毒したことさえあった(現在は水溶性洗濯袋を導入)。そんな中、地域住民から病院宛に手作りの弁当や絵手紙、応援動画なども届き、あたたかい支援に涙する場面もあった。今年に入り高齢者の入院が増えるにつれ食事やおむつ介助で接触機会も増えたが、職員の意識も変化した。これまで感染病棟では入院前PCR検査を行うチームと陽性患者を看るチームに分かれていたが、「ぜひ患者さんを受け持ちたい」という職員の「うれしい本音」も聞かれた。患者の命と職員の命。天秤にかけられるはずもないジレンマが生んだ成長だった。

◆誰かのために
市民へのワクチン接種と院内の感染対策は車の両輪のような関係。当院でのワクチン接種は、患者さんが受けやすい週末を選んで行われている。砂田浩史事務部長によると接種

出し「柔軟に対応する体制ができた」と総括している。出来るだけ多くの患者さんを診て、少しでも笑顔になってもらうため一般病棟のオンライン面会、陽性者となった妊婦が出産した赤ちゃんと画面越しに対面できるベビー面会など新たな取り組みも行われている。時々刻々と変わる情勢に合わせ、病院は日々変化している。

新型コロナ遺伝子検査数 (2021年1月～2022年3月)	17,389人
コロナワクチン接種人数 (2022年3月末まで)	26,902人
コロナ陽性者外来患者数 (2021年4月～2022年3月)	1,077人
コロナ陽性者入院患者数 (2022年3月末まで)	243人



はじめましてのご挨拶

〜新任医師紹介



産婦人科

遠藤 英作 (エンドウ・エイサク)



実家は、下館二高前で約60年前に開業した産科医院。自信と経験に裏打ちされた診療で地域の母親の背中を押し、周産期医療を支えてきた父

の勧めで高校は北海道にある全寮制高校へ進学。帰省時、地元スーパーで「こんなに大きくなりました」と父に報告する親子に出会い、地域に根ざした医者への在り方を学んだ。

興味のある分野は不妊治療。「さまざまなアプローチがあるが、父のように自信をもって医療を提供できる医師になりたい」。休日はやんちゃざかりの2歳の子とも遊ぶ、優しきパパでもある。

形成外科

田村 文一 (タムラ・フミカズ)



小学生の頃から漠然と「医師になりたい」と思っていた。念願かない研修医となるも、この診療科を選ぶべきか決め切れずにいたところ、形

成外科に興味を持った。外傷や美容系の手術は何と言っても「見た目」が重視されることが多い。必然的に手術の腕が試されるが、限られた診察時間で患者さんの思いをくみ取ること。「本当にその手術や処置が必要かどうか、丁寧に話し合っていきたい」と話す。

将来的には形成外科・手外科の専門医を目指しており、整形領域の技術習得にも意欲を燃やす。

耳鼻咽喉科

福田 航平 (フクダ・コウヘイ)



広島県出身。製薬会社勤務の父親の影響で医師を志し、高校サッカー部の先輩の勧めで筑波大に進学した。耳鼻咽喉科頭頸部外科専門医の

資格を持ち、頭頸部の良性疾患から鼻の内視鏡手術、耳の簡単な処置までそつなくこなす。診察で気を付けていることは、出来るだけ難しい言葉を使わず、「耳の遠い患者さんもうらっしゃるので、大きな声ではっきり話すことですね」。

家では1歳と2歳の父親で、息抜きはゴルフと一人カラオケ。同姓同名の紅白出場演歌歌手・福田こうへいの「南部蝉しぐれ」が十八番。

産婦人科

阿部 英恵 (アベ・ハナエ)



小さいころから生き物や図鑑を眺めるのが好き。加えて、兄弟がけがをした時の手当てはお手の物だった。人と話すのも好きなのと、周り

の影響もあって医師を志した。大学の実習でお産の現場に立ち合ったのがきっかけで産婦人科医師に。内科から外科まで幅広いアプローチできるのが魅力で、診察の際は「一度患者さんの立場に立って診療計画を立てることが大事」と話す。

大の旅行好きだったが、最近はず愛猫のノルウェーシヤンフォレストキヤットのルイ君(1)とまったり過ごす休日がお気に入り。

産婦人科

森 悠樹 (モリ・ユウキ)



医学生の際にお産を見学し、人が亡くなることもある病院の中で「患者さんにおめでとつと言え産婦人科を志しました」。前職の筑波大学

附属病院では不妊治療や周産期診療に加え、教育や研究にも尽力。モットーは一人ひとりに合った最適な治療を提供し、患者さんを笑顔にすること。前回筑波学園病院赴任時に産婦人科専門医を取得し、今年はず生殖医療専門医の試験を受ける予定。家では最近飼いだめたハムスターの「ハム斗君」と、4歳になる息子とキャッチボールをする時間がほっとするひととき。

呼吸器内科

花澤 碧 (ハナサワ・ミドリ)



「流されやすい」との自己分析通り、高校の時友達の影響で医師を目指した。呼吸器内科の医師として、昨年1年間は貴重な経験を積めた。

進行具合や家庭状況など、病気の背景もさまざまな肺がん患者を診断から看取りまで行った。緩和ケアに入ってから本人や家族を交え出来るだけ多くの選択肢を提示。互いに納得のいく最期を迎えることが医師として大事な仕事だと実感した。

特技は小学生から始めたサッカーで、自宅でイングランドのプレミアリーグの試合観戦をするのが息抜きの一つとなっている。

腎臓内科

新坂 真広 (ニイサカ・マサヒロ)



歯科医師として地域に貢献する父の背中を見て育った。昨年からは非常勤医師として筑波学園病院に勤務し、腎センターで透析患者の管理ほ

か、病棟での回診など多忙な日々。治療に際しては患者さんの考え、価値観、社会的背景などを考慮しながら「さまざまな選択肢を提示したい」。目下の目標は、静脈を動脈に縫い合わせることで老廃物を取り除くシャント手術の技術向上で「内科医としての幅を広げたい」。コロナ禍以前は欧州を中心とした海外旅行が趣味だったが、最近は近所の散歩でフチ旅行気分を味わっている。

ミンナノホンヤ

A book must be the axe for the frozen sea inside us.
František Kafka.

一汁一菜でよいという提案



新潮社
定価：1980円

貸出カード
土井善晴
日常の食事は、ご飯と具だくさんの味噌汁で充分。無理のない生活のリズムを作り、心身ともに健康であるために「一汁一菜」という生き方をはじめてみませんか。料理研究家土井善晴による根源的かつ画期的な提言で、一汁一菜の実践法を紹介しながら食文化の変遷、日本人の心について考察する。著者撮影の食卓風景も数多く掲載。ちなみに表紙はご飯、文字は菜、帯は味噌の色。日本人の「普通においしいもん」とは。

犬が星見たーロシア旅行



中央公論新社
定価：900円

貸出カード
武田百合子
生涯最後の旅と予感している夫・武田泰淳とその友人、竹内好とのロシア旅行。星に驚く犬のような心と天真爛漫な目を以て、旅中の出来事、風物、そして二人の文学者の旅の肖像を克明に、伸びやかに綴っている。コロナ禍やロシアのウクライナ侵攻で海外旅行は縁遠い娯楽となってしまったが、「犬の目」で観察した人々の営みは昔も今も滑稽で、どこか愛おしい。読売文学賞受賞作。旧版には色川武大の解説付き。

奉仕の精神、伝えたい



検査部 技師長
深澤 政勝

気づけば三十余年、顕微鏡を覗き続けている。「医療従事者は奉仕の仕事。仕事がしんどいと思ったことは、あまりないかも」元日本代表の中村健剛選手を輩出した都立高時代はサッカーに熱中。知人の紹介で興味を持った臨床検査技師の国家資格を取得。がん研付属病院（現・がん研有明病院）細胞検査士養成所で細胞診のトレーニングを積み、卒業後は筑波大学で32年、学園病院では8年目。病理細胞診検査のほか、発熱外来では仲間と共に最前線で検査を引き受ける。

大学病院時代、臨床的に良性とされた甲状腺結節の細胞を再度調べたところ、比較的可疑な「髄様（ずいよう）がん」を発見した。「命を救う原体験」のような出来事だった。勤務中患者さんと直に接する機会は少ないが、自ら出した検査結果は手術の可否など臨床現場ではダイレクトに反映される。重い責任がかかるが、そんな時はアインシュタインの言葉を胸の裡でつぶやく。「人の価値とは、その人が得たもので測られる」



コロナ治療薬、安定供給に尽力



薬剤部 3B 病棟薬剤師
沼尻 綾子

つくば市内で薬局を営む母。客の話しにじっくり耳を傾け、常に最適な薬を提案していた。小学校の常備薬はもちろん、プールの水質検査や教室の照明の明るさなども指導する「学校薬剤師」として地域貢献する後姿を追い、自身も同じ道を志した。コロナ陽性者が入院する3B病棟薬剤師となって2年余り。退院患者に飲み合わせの注意喚起を行う服薬指導のほか、入院予定者が持参した常備薬やお薬手帳、診療情報提供書や看護サ

マリイから服薬歴を調べ医師や看護師に情報提供する。陽性者の持ち物はウイルスが死滅する72時間ポリ袋に入れて保管するが、手探りで袋の中のお薬手帳のページを繰って服用歴を調べたことも。また、感染初期はコロナ感染症治療薬「レムデシビル」の確保に尽力。不足が出ないよう神経を使ったほか、今後の病態解明に役立てようと治療薬の有効性や副作用のモニタリング結果を蓄積する観察研究にも積極的に参加している。

どんおゆめ、みてるかなあ・・・

こもと あやね
古元 綾音ちゃん
2022年4月13日生まれ



from mather
「私が『綾』夫が『音』、二人の希望を合わせた名前です。元気でやさしい子になってね！」

さては・・・おなかいっぱいデスネ



しばた きい
柴田 稀衣ちゃん
2022年3月19日生まれ

from mather
お腹の中にいるときから、お姉ちゃん（5）に「きいちゃん」と呼ばれていたのが名づけました♪



babystagram
ベビスタグラム

当院産科病棟で産まれた元気な赤ちゃんをご紹介します。

シームレスな受診への第一歩、「つくば医療 MaaS」実証実験



しまだみみ・はな・のどクリニック

茨城県つくば市島名 2899-2
 (万博公園西 F27 街区 4)
 TEL 029 (893) 3387
 診療科：耳鼻咽喉科 小児耳鼻咽喉科
 休診日：水、土曜午後、日・祝日

診療時間	月	火	水	木	金	土
午前 (9:00 ~ 12:15)	○	○	休	○	○	○
午後 (14:30 ~ 18:15)	○	○	休	○	○	休

※土曜は 13:00 まで診療、日曜祝日休



島田 秀瑛 院長

目線合わせ、地域医療にまい進

小学生の頃、祖父ががんで長い闘病生活を送った。「何かの役に立ちたい」。幼心の決意は固く、長じて世代を問わず風邪からがんまで幅広く診られる耳鼻咽喉科の医師になった。9年間の筑波学園病院在職中は多い時で年間250件超の手術をこなし、未知の術式があれば動画を取り寄せどん欲にスキルを吸収した。

昨秋開院したクリニックは人も建物も明るさを重視。診察は医療事務2人を交互に配置するシステムで、自らは患者さんと目線を同じ高さに合わせて真摯に向き合う。どの角度からでも処置中の様子が見られるモニターは4台設置。治療中の安心感につなげるほか、子どもには鼻鏡や耳鏡などの器具を渡し「これで悪い所を診るんだよ」と語り掛ける。「医療を介して、地域の皆さんと明るく笑顔でコミュニケーションを図ってきたい」。クリニックの白壁に描いた、大きなゾウさんのように。

タクシー降車から外来受付へ直行し顔認証を行った。2月9日



アプリで呼び出したタクシーの車内で顔認証を行う様子。病院の電子カルテには患者情報が瞬時に表示された。2月9日

県やつくば市、筑波大学ほか民間企業など74者でつくる「つくばスマートシティ協議会」では、高齢者や障がい者が安全・快適に移動できる街の実現を目指し市内各所で次世代交通サービス「つくば医療 MaaS (マース)」の実証実験を開催。このほど当院でオンデマンドタクシーの顔認証実証実験が行われました。

医療 MaaS は、スマートフォンで呼び出した「AI デマンドタクシー」の車載タブレット端末に市内6カ所の病院までの最短ルートが提示され、乗車中に顔認証を行うことで患者データが病院に送られ受付を省略しシームレスな受診に臨めるというものです。

今年1月には筑波大学附属病院で自動運転車いすの院内移動が、今回は当院で顔認証システムの実証実験が行われました。

実証実験当日の午前9時30分過ぎ、患者さんがタクシーで到着。車内のタブレット端末で顔認証を行い、再来受付を省略し整形外科外来に直行しました。診療科の窓口で再度タブレット端末による本人確認を行ったことで、事務処理手続きの省略やそれに伴う3密回避などが確認されました。実験に参加した桑畑淑代(ひでよ)さん(80)は、昨今の高齢者による交通事故多発を機に免許を返納。「思ったより簡単で驚いた。こういった取り組みはどんどん進めてほしい」と話していました。

並木診療所、45年の歴史に幕「一言感謝を」母親ら詰め掛け

1977年春の開所以来たくさんの親子を見守ってきた並木診療所が、このほど45年の歴史に幕を下ろしました。最終日には別れを惜しむ患者さんが多数訪れ、涙ながら柴崎佳代子医師に感謝の言葉を述べる場面もありました。

同診療所は45年前の昭和52年春に開所。「人口日本一の村」として有名になった新治郡桜村にできた並木ショッピングセンターの一角で診療を開始しました。当時周辺には小児科がなく、それまで土浦市内の町医者までバスで通っていた「医療難民」が幼子を抱え診療所に列を成し、インフルエンザ予



患者さんから花束を受け取り感極まる柴崎医師。最終日の待合室は感謝の言葉と涙で頬を濡らす母親らであふれた。3月24日

防接種の時期には午後だけで100人ほどが訪れたことも。

最終日の3月24日にはOBやOGも大勢集まり、久しぶりに旧交を温めました。17年ぶりに診療所を訪れたという元看護師の小松崎洋子さんは「とにかく忙しい診療所だったけれど、今はただただ懐かしい」と目を細めていました。同所で4人の子どもの診てもらったという澤田瞳さんは「信頼できる診断があり、言葉通り本当に良くなった。最後に一言感謝を申し上げたかった」と花束を持参。柴崎医師は感謝の言葉と共に花束を受け取っていました。



最終日には原田繁病院長も駆けつけ、長年診療所を切り盛りした柴崎医師の労をねぎらった



旬景 県南

谷田部海軍航空隊の桜

四角形の外周路に囲まれた病院敷地は、戦前、谷田部海軍航空隊の飛行場でした。予科練で有名な霞ヶ浦海軍航空隊の補助部隊として開設された同航空隊では、通称「赤とんぼ」と呼ばれた練習機による訓練が中心でしたが、戦局の悪化で首都防空の実戦部隊になりました。昭和20年春には特攻隊が編成され、40人の尊い命が南方の海に散りました。戦争の記憶や平和の尊さを次世代に伝えようと建立された記念碑の傍らには、77年前に出撃する隊員を見送ったソメイヨシノが今年も花を咲かせました。

「健診センターだより」公開中

健康診断や人間ドックに関する患者さんからの疑問に医師がQ&A形式で答える「健診センターだより」第2号を発行中です。HPにもアップしましたのでQRコードよりご覧ください。



予約・お問い合わせ電話番号の変更

これまで受診のご予約や各種お問い合わせにご利用いただいていた電話番号は、このほど下記の番号に統一されました。音声ガイダンスに従ってご利用ください。何卒よろしく願います。

☎0570 (03) 1355

ご意見・ご感想を募集します

広報誌へのご意見・ご感想をお待ちしております。住所、氏名、年齢、性別をお書き添えの上、下記宛先までお送りいただくかEメールでお送りください。

【宛先】茨城県つくば市上横場2573-1
筑波学園病院総務課 habatake 編集部

【Eメール】info@gakuen-hospital.or.jp

編集後記

第2号では、コロナ禍に翻弄されながらも奮闘する病院のありのままを特集しました。取材中、職員から「こんな視点で取材してみたら？」という提案や「自分よりもっと頑張っている人を取材してあげて」などの言葉を掛けられました。

「利他」という言葉があります。他人の利益を尊重して初めて、人の心は真の満足感を得るのではないのでしょうか。たった1回のPCR検査は、多職種のさまざまな仕事で成り立っています。取材を通し、私もようやく病院の仲間になれたような気がします。次回発行はスイカがおいしい8月です。

